

争いのない心を信じて

小学六年 工藤 埜采可

今年の春、修学旅行で沖縄を訪れたことが戦争について考えるきっかけになった。戦後八十周年関連で配られた子ども新聞に沖縄戦の記事があり更に印象に残った。日本での戦争は祖父母の世代かそれより前の事だ。だから私にとって戦争は遠い昔の出来事のように感じる。戦争体験がない私だが戦争はもう二度と起きてほしくないと願っている。

歴史の授業で学んだ室町時代の一向一揆では、浄土真宗の信者や僧が信仰と生活を守るために戦った。親鸞様ならば、目の前で起きたであろう戦をどう見たであろうか。「人を傷つけてはいけない」という教えがあるにもかかわらず、争いが起きた。戦争は、それぞれの正義や思いがすれ違い、起きる。また、仏教の授業でナチス・ドイツについても学び「善」と「悪」について考えた。ユダヤ人を殺す事を正しいと信じていた人もいたと聞いて、耳を疑った。戦争は人を、何が「善」で何が「悪」なのかを見失わせてしまうのだろうかと大変驚いた。

なぜ人は戦争をするのか。時代や状況、環境の違いが関係あるのか。

戦争に反対なのに戦わされた人々はどんな気持ちだったのか。どんな理由であれ、それでも戦わざるを得なかったのだろうか、と疑問があふれる。もし私が同じ立場に置かれたら「今すぐやめてほしい。」

「戦争を始めた人が憎い」と強い感情が生まれたに違いない。先日、書道で「安穩」の二文字を書いた時は意味を知らなかったが調べてみて、その言葉に込められた平和への願いを感じた。そして、親鸞様の「世のなか安穩なれ、仏法弘まれ」という教えの意味を知った。どうしたら人々が争わず、心安らかに生きられる世の中になるかを考えていきたい。この夏、普段あまり考えない仏教や戦争について理解が少し深まった気がする。